

627. Mテストを用いた鍼治療が合宿中のテニス選手の粘膜免疫能に影響を及ぼすか？

○池宗 佐知子¹、櫻庭 陽²、近藤 宏³、市川 あゆみ³、
 泉 重樹¹、小堀 孝浩⁴、蝶間林 利男⁵、森山 朝正³、
 宮本 俊和¹

(¹筑波大学大学院人間総合科学研究科、²鈴鹿医療科学大学鍼灸学部、³筑波技術大学保健科学部、⁴筑波大学理療科教員養成施設、⁵横浜国立大学教育人間科学部)

【背景】Mテスト（経絡テスト）は、伸展動作に伴い自覚していない不調動作を検出するための動きの負荷法や治療システムである。Mテストは、多くの競技種目で用いられており、コンディションチェックの一項目となり得ることが報告されているが、Mテストを用いた鍼治療の効果について客観的に評価した研究は少ない。一方、鍼治療は、高強度運動により下がる粘膜免疫能の低下を抑制することが示唆されており、合宿中の疲労感を抑制する可能性がある。【目的】本研究は、Mテストを用いた鍼治療が、5日間の合宿を行うテニス選手の粘膜免疫能に影響を及ぼすかどうかについて検討することである。【方法】対象はY大学テニス部の合宿参加者37名である。封筒法により鍼治療群（Acu群：18名）とコントロール群（Con群：19名）に分けた。粘膜免疫能の指標として、両群とも毎朝唾液採取を、ELAISA法を用いてSIgA濃度を測定し、SIgA分泌速度を算出した。また、疲労のアンケートとして、朝夜ごとに自覚的な疲労度（精神的及び身体的）について、夜ごとに自覚的な練習強度について調査した。Acu群は毎晩Mテストを行い、経絡上のどの部位の動きに制限があるのかを明らかにし（Mテスト陽性動作数）、検出された経絡上の経穴に円皮鍼（長さ0.6mm、Pionex）を用いて鍼治療を行った。【結果・考察】自覚的な疲労度を示す身体的疲労度及び精神的疲労度は、両群ともに徐々に増加していく傾向であったが、群間の差は認められなかった。また、自覚的な練習強度は合宿2日目、3日目でCon群に比べAcu群で有意に低値を示したが、4日目以降では群間に差がなかった。Acu群におけるMテスト陽性動作数は合宿前と比較して、3日目、4日目で有意に増加した。しかしながら、SIgA分泌速度は、両群ともに有意な変化は認められなかった。本研究の結果から自覚的な疲労度の増加は認められたものの、粘膜免疫能に影響を及ぼすほどの運動強度ではなかったことが考えられるため、Acu群におけるSIgA分泌速度の有意な変動が認められなかった。先行研究では練習後に唾液採取を行っているものもあり、唾液採取のタイミングを再考することで、自覚的な疲労項目と相関が得られるかもしれない。また、粘膜免疫能に影響を及ぼす経穴として、頰車などを用いているが、本研究ではこれらの経穴を使用していない。粘膜免疫能を高める治療をするためには、Mテストと共に粘膜免疫能を高める可能性のある経穴を取り入れた治療を行う必要があるかもしれないが、これらは今後の研究課題である。【結論】本合宿は、自覚的な疲労度の増加は認められたが、両群共に粘膜免疫能の低下をきたす運動強度ではなかったため、Mテストを用いた鍼治療が合宿時のテニス選手の粘膜免疫能に影響を及ぼさなかった。

Key Word

Mテスト 鍼治療 粘膜免疫